

# Tubbataha Reefs 海中公園へ

谷口 洋基  
阿嘉島臨海研究所

Diving in the Tubbataha Reefs Marine Park in the Philippines

H. Taniguchi

群れを成して頭上を泳ぐバラクーダ、ゆっくりと足元を通り過ぎていくホワイトチップシャーク（ネムリブカ）、そこはすばらしく透明度のいい海。何気なく保坂理事長の方を見ると、私の背後を指差して私に何か伝えようとしている。振り返ると目の前には巨大なマンタ（オニイトマキエイ）が、ドロップオフの壁を背にしている我々の視界に入るのは真っ青な水と水面から差し込む太陽の光だけ。そのブルーを背景にゆっくりと近づいてくる巨体を我々は暫しボーッと眺めていた。マンタは珍しそうに我々の頭上を二度旋回し、また濃いブルーの中に消えていった。



写真1. 巨大な海綿と大森教授

## クルージング

フィリピンのパラワン島の首都プエルト・プリンセサの南東 182km に位置する Tubbataha Reefs 海中公園は、南北2つのリーフを中心とした 33,200 ヘクタールという広大な海域がユネスコ世界遺産として登録されている。このあたりには宿泊施設が無いので、船でクルージングしながらのダイビングとなる。マニラ近郊のバタンガスという港町から船に乗り、Tubbataha Reefs、その他のダイビングポイントを経由しながらプエルト・プリンセサへ向かう 6 日間の旅路。1999 年 3 月 14 日、私は保坂理事長、大森教授を含む 10 人の仲間と共に、途中のマーケットで買ったマンゴーを山のように抱えてクルージング船 Big Blue Explorer に乗り込んだ。

乗客は我々以外にフィリピン、オーストラリア、フランスなどのグループが参加しており、総勢 20 名ほど。部屋は二人部屋で、私は東水大の深見君と同室。シャワー・トイレ付だが部屋の大部分を二段ベッドが占めていた。まあ、部屋では寝るだけなのでこれで十分。しかし、バスルームは水はけが悪く、一度使うとくるぶしまで溜まった水がなかなか引かない。結局一度使って断念。仕方なく私と深見君は船内の共同トイレとシャワーを使うことにした。もっとも、深見君はダイビング後に甲板で水を浴びる以外、旅の間中シャワーは使わなかったらしいが。どうやらこの船はもともと日本の水産庁所有のものであったらしく、船内のいたるところに日本語の説明書きがある。英語に書き換えられた様子もない。クルーは全員フィリピン人、これで大丈夫なのだろうか。案の定、船長はじめ航海士や機関士にとっても、用途不明のスイッチやレバーばかりのようだ。

船長に言わせると「難しい機械や装置は使えなくても長年の経験がものをいう、だから大丈夫」ということらしいが、と、言いつつも彼らはここぞとばかりに大森先生をつかまえては、それらの説明を聞いていた。クルージングの間、大森先生は我々との会話よりも彼らに説明するために要した時間の方が長かったのではないだろうか。

翌朝目が覚めて甲板に出ると、青い海に小島が一つ。スタンバイOK、いつでもどうぞ、といった感じ。後々気付いたことだが、毎朝ほぼ決まった時間にアンカーを下ろす音で目が覚める。丁度いい目覚し時計代わり。

7時に朝食をとり、8時にはダイビングへ出発。島の沖合いに停泊した船から船外機付きのボートにグループごとにより込み、一路ポイントへ。

海の中はとても透明度が高く、気持ちがいい。サンゴの被覆度も高く、浅い礁原では樹枝状ミドリイシが優占しているようだ。しかし、クシハダミドリイシのような大きなテーブル状のサンゴはあまり見られなかった。この辺りの海域には、それこそ海面からちょこっと顔を出した程度の小さな島が多く、灯台なども少ないために事故も多いらしく、礁原には座礁したまま錆びてしまった大型船や、バラバラになって沈んだ船の残骸が見られる。そしてその残骸はイボハダハナヤサイサンゴやヘラジカハナヤサイサンゴなどハナヤサイサンゴの仲間ではびっしりと覆われていた。そしてすこし深くまで潜ると、ケラマでは見ることでできないパラオクサビライシがたくさん転がっており、人間がスッポリ入ってしまう



写真2. 小島に上陸

ほど大きな壺状の海綿、ミズガメカイメンがドロップオフの壁や礁斜面のいたるところに見られた。この辺りの海域では今でもダイナマイトをつかった漁が行われているらしく、所々にその傷跡が見られた。しかし、魚は数、種類共に豊富で、大きな回遊魚の群れも頻繁に見られる。少し前までは阿嘉島周辺の海でもこのような景色が見られたそうだが、今では魚もずっと少なくなっている。

前年起きた白化現象の影響は、白化のピーク時の様子はわからないが、いくつか白化のため死亡したと思われる群体が見られたほかはそれほど大きな被害はないようだった。

と、このようなダイビングを毎日、午前2本、午後1~2本こなし、あとは缶ビール片手に沈む夕日を見ながらそれぞれ自由な時間を過ごす。食事は三食ともバイキング形式で、肉料理、魚料理、スープにデザートとなかなか美味しい。

こんな贅沢な日々を過ごしていると、あっという間に6日間のクルージングも終わり、プエルト・プリンセサに到着。船の方は、我々を降ろした後、次ぎの客を乗せて我々の来たコースを逆に辿りながらバタンガスへ戻る。

そして、我々は今回お世話になったクルージング船のスタッフに見送られつつ、空路マニラへ向かった。

### 旅を終えて

仕事上、毎日のようにケラマの海で潜り、多くのサンゴ礁の生き物を見てはいてもなかなか海外のサンゴ礁に潜る機会のない私にとって、今回の旅行はいろいろな意味でとても貴重な経験となった。このような旅ができたのもそこにすばらしい自然が残っているからこそである。これから先、十年経っても、百年経っても今と変わらず美しい海であり続けて欲しいと思うと同時に、そうなるように努めなければと思った。

最後に、今回、旅行に誘って頂いた保坂理事長はじめメンバーの皆様、本当に有り難うございました。